



令和6年12月発行
第39号



社会福祉法人
同胞援護婦人連盟

こどものうち 八栄寮
小4女兒 作

「心に火をつける」

理事長 村松 満

「普通の教師は必要なことをただ喋る、良い教師は分かるように説明する、優れた教師は自分でやってみせる、そして偉大な教師は生徒の心に火をつける」

これはアメリカの教育学者ウィリアム・アーサー・ウォードが書き記した有名な言葉ですが、私がこの言葉に初めて触れたのは、かつて東京都立大学の事務局に在職していた折、時の学長であった文化勲章を受章された西沢潤一先生の講話を聴いたときでした。

その当時、私自身事務局長という所属職員の多い職にあったこともあり、この言葉の意味に感じ入り、これは教師だけでなく、広く組織の上司部下、先輩後輩、さらには親子などの関係にも通ずるものがあるのではと自分なりに思いを巡らせ、自らの戒めとしても胸に刻んだものでした。西沢先生も、相手が学生であれ、教職員であれ、同じようにこの言葉を話の中に取り入れ、場合によってはそれを色紙に書いて人に渡していたことからすると、先生ご自身の本意も実は、誰にとっても生きる上での教訓になりうる言葉として大事にされていたのではと推察しています。

自分でやる気にならなければ本当の進歩はない、そのやる気を起こさせるのが本当の「先生」の役割だと事あるごとに主張されていたのでした。

あれから相当の時間が経ちましたが、現在、児童福祉に関わり、時に「理事長先生」と呼ばれる身となり、改めてこの言葉の意味深さを考えることがあります。どう子どもたちの心に火をつけていけばいいのか。心に火をつけるのはあくまで子どもたち自身であり、外部から直接火をつけることはできません。しかし、そのきっかけを与え続けることはできる。

施設の行事に招かれると、その時の子どもたちの笑顔は何物にも替えられません。

子どもは様々な経験・体験をしながら刺激を受け、好奇心を持ち、何かを受け入れ、そして成長し、大人になっていきます。体験格差などと言われる今日、子どもたちにあえて多様な体験の場と機会を提供し続けていくことは、子どもたちが自ら何かに気づき、自身の心に火を灯すことにつながっていくのではないかと。そんなことを信じて、子どもたちを眺めているところです。先のアーサー・ウォードは、他にも次のような言葉を残しています。

「好奇心、これこそが学習というロウソクの芯になる」と。



日常・非日常

こどものうち八栄寮 施設長 大村 正樹

八栄寮に入所してくる子どもたちの入所前の生活の多くは、私たちの目から見ると「非日常」である。

「幼児さんのとき、夜、目が覚めたら、お母さんはいつもいなかった」「お腹がすいて、いつも近くの保育園に弟とっておやつをもらっていた」「2歳のとき、カップ麺を毎日食べていたんだって」「お母さん、どんどん新しいお父さんを連れてきて、誰が本当のお父さんかわからない」「ごはんのとき、お母さん、怪獣になって怖かった」「お父さんにヤキをいれられた、これがその痕」「私小さいとき、パンツはく習慣なかったんだ」「家の中に猫が何匹もいて、おしっこ臭かった」そんな話を子ども達は淡々と私に語った。

一方、子ども達からすれば、それが「日常」だ。

しかし、日本の社会でこの子達が経験した生活は「非日常」であり、社会にでたとき、周りの人から変人扱いをされるなどして、そのギャップに苦しむことになる。

子どもたちが苦しまないように、日本においての社会の「日常」を毎日の生活の中で提供していくのが児童養護施設の重要な仕事の一つだ。

しかし、一度身についた「習慣」はなかなか変えることができない。職員は長い時間をかけ、何度も何度も同じことを繰り返し、子どもたちに伝えていく。時には反発をするなど、職員への暴言や暴力が発生することもある。職員からすると当たり前の声掛けであっても、このような「習慣」を身に着けた子どもからすると、脅威や恐怖を感じてしまい、自分を守るために反動的に攻撃してしまう、必ずしも子どもに全て非があるわけではない。

そんな子ども達があるとき、普通に朝起き、ご飯を食べ、学校に行き、夜になれば、就寝することが当たり前になる。そのとき、子どもたちの価値観も変わり、日常のイメージが変わる。その日を信じて職員は毎日子どもたちと関わっている。これが職員の「日常」である。





新たな一面

こどものうち八栄寮 児童指導員 遠藤 楓花

入職して早くも半年が経ち、あっという間に初めての夏休みが終わっていきました。夏休み中は様々な行事やレクリエーションがあり、普段の生活の中では見ることはできない子どもたちの新たな一面を発見することができました。

特に驚いたのが中学3年生のAちゃんの各家キャンプでの姿。普段から1人で過ごすことが多く、必要以上に人と関わることはあまりしない子。家キャンプがあると話した際も「行きたくない、めんどくさい」と話し、当日もあまり乗り気ではない様子でした。しかし、キャンプでの川遊びでは他の子どもたちや職員が楽しんでいる姿を見て、自分から川へ濡れに行ったり、浮き輪を使って遊んだり、笑顔溢れる子どもらしい姿がありました。また、年下の子どもたちや職員の手助けをしてくれるお姉さんらしい一面も。

行事は普段の生活ではあまり見ることはできない、子どもたちの大切な一面を引き出してくれます。春・夏の行事を通して、子どもたちに心から楽しんでもらうためには職員自身も楽しむことが大切であると実感しました。行事の際はもちろん、日常の関わりでも自ら楽しむをモットーに、子どもたちの様々な姿を引き出すことができる職員になれるよう努力していきたいと思います。



いつか訪れる「日常」へ

こどものうち八栄寮 児童指導員 重原 千桜

「非日常」とは、通常の日常生活では体験できないような場面や状況と辞書にある。八栄寮に来て半年が経とうとしているが、私はいまだに八栄寮での生活が非日常のままだと感じる。

4月、日課を覚えるのに必死で八栄寮での生活には当然慣れておらず、「非日常」が続いていた。少し慣れてくると、子どもたちもさまざまな顔を見せてくれるようになった。その中でもケンカが起きたり、こちらの声かけに反応してくれなかったりと、私にとっては戸惑うことばかりで「非日常」が続く。そして9月、子どもたちとのトラブルに少しは慣れるが、行事を経験したり、1人で行う仕事が増えたりと、まだまだ初めてのことが続く。そういった生活は、私にとっては「非日常」だと言える。

これから冬の行事や子ども達の受験などがあり、まだまだ「非日常」は続くのかもしれない。しかし、いずれはそういった「非日常」が繰り返されることで当たり前になり、「日常」に変わっていくのだと思う。いつか「日常」になるこの日々を大切に「非日常」を過ごしていきたい。



日常を紡ぐ

こどものうち八栄寮 児童指導員 奈良 京子

7月某日、太陽の家のキャンプ。子どもたちにはそれぞれに担当の職員が。キャンプの間、担当と一緒に行動し、安全に楽しく過ごすのです。私が担当した R 君、日常生活で子どもたちにちょっかいを出しては、けんかを勃発させるちょっとしたトラブルメーカー。既に私とは孫ほど年の差のある R 君。1泊2日何事もなく乗り切れるか？の不安、R 君をはじめ子どもたちと思い切り遊べる楽しみな気持ちで当日を迎えました。

キャンプでの R 君は驚くほど素直に大人の話聞き、誰にもちょっかいを出さず、そしてお漏らしもせず（日常の R 君はお漏らしをしてしまう…）

「次はこっちに行こう！」「お馬さん触るの怖い！」とはしゃぎ、キャンプを思い切り楽しんでいました。「R 君は、こんなにも子どもらしいんだ。これが本来の R 君なのでは！」と強く思いました。非日常で見せた本来の姿。思えば、児童養護施設で暮らすということが非日常であり、私たち職員は子どもたちの日常を取り戻すために在る。1対1で関わることは施設では難しいけれど私たちはあなたたちを常に見ていて、幸せを願っているよ。強い思いで非日常を日常へと紡ぎ、子どもが子どもでいられるように私たちは日常を大切にしていけるのです。



日常・非日常

こどものうち八栄寮 保育士 鈴木 奈津美

今年もやって来た夏休み。高校3年生の M くん、高校1年生の K ちゃん、中学3年生の A ちゃんと横浜（VS パーク）・江の島（すとぷり海の家）にお出かけしました。兄妹は幼児の頃に入所し、何年かは同じ家(ユニット)で生活していた時期もありましたが、今はそれぞれの家(ユニット)で生活をしています。兄妹で遊んでケンカしてにぎやかな幼児の頃、一緒に新江ノ島水族館にお出かけしました。カメの形のメロンパンを口いっぱい頬張るかわいい姿、イルカが「キュッキュッ」と鳴く真似している姿、楽しそうな笑顔をよく覚えています。この10年の間にはフレンドホームさん宅にお泊りさせて頂き、兄妹で過ごす時間をつくって頂きました。たくさんご迷惑をおかけしましたが兄妹の成長を見守り、温かく受け入れてくださったことで、兄妹の絆が今も強いととても感謝しています。M くんは退寮もあと半年となり、八栄寮での兄妹の時間はあと少しです。長いようであるという間の兄妹の時間。年齢が上がり部活や進路とそれぞれの生活が軸になっている時期ですが、この夏に見たにぎやかな兄妹の絆を大切に、「非日常」とならないよう、私にできることを考えていきたいと思えます。



日常を取り戻すための支援

リフレここのえ 施設長 横井 義広

母子生活支援施設は、様々な理由で入所する親子がいます。全国的には 56%が暴力被害で入所しています。それ以外でも何らかの理由で元居た場所からの転居を余儀なくされてたどり着いています。それはそれまで過ごしていた日常が奪われることです。お母さんは、職場、親族、きょうだいやママ友など。子どもたちは、学校の友だち、先生、塾の友達や講師、スポーツクラブなど。そういった日常から、施設での安全な生活のために離れざるを得なくなっています。施設に来る前の生活が、暴力や虐待の状況にある、ヤングケアラ一等になっている状況にあるとしたら、その状況が既に非日常とも言えるかもしれません。

ある子どもは、父から母への暴力を心配して学校に行けませんでした。リフレここのえでは「お母さんの心配はリフレの大人がするからね」と伝えて、子どもは学校に行き始めました。あるお母さんは、歯医者と心療内科に通いたかったけれど、夫は暴力が明るみに出るのを恐れて妻を病院に通わせませんでした。入所後通院して、お母さんの歯はキレイになり、大きく歯を見せて笑えるようになりました。また、不眠等で苦しんでいましたが通院をして薬を処方してもらい眠れるようになりました。

回復する過程は人それぞれです。まずは、お母さんが安心して休むことも大切です。見方によっては引きこもっていたりするように見えることもあります。職員はそのような状態に寄り添いながら、モーニングコール、買い物代行、ご飯が作れない時にはお部屋に入って食事作りをして、きちんと休むことを保証します。

子どもは施設での生活の中で「退行」することがあります。赤ちゃん返りをすることもあります。学童保育の職員は、日々の中でおんぶや抱っこをせがんできたり、自分でできることも甘えてきたりするという場面に時々出会います。少し年齢の高い子どもは、直接甘えられないので、反抗したり、ぐずったりして手を焼かせるということで甘えを表出したりすることもあります。職員はそれぞれの子に向き合い、気持ちの表出を受け止めます。お母さんも子どもも安全な環境の中で、安心して甘えたり、反抗したり、そういうことができる環境や時間を通じて、少しずつ回復して、日常に戻ることができるのだと思います。リフレでは家族が日常を取り戻すことが大切だと考え、日々支援をしています。

【各施設 在籍者数】（令和6年11月末現在）

こどものうち八栄寮	リフレここのえ	八王子市子ども家庭サービス事業利用者数
幼児 9名 小学生 14名	乳幼児 18名	令和6年6月～令和6年11月末
中学生 16名 高校生他 10名	小学生 14名	ショートステイ 372名
【計 49名】	中学生 2名	トワイライトステイ 152名
	【計 17世帯 51名】	合計 524名

旅行という『非日常』

リフレここのえ 母子支援員 後藤 愛香

9月に親子旅行がありました。コロナの影響でずっと行けていなかったディズニーランドへ6年ぶりに行きました。

当日を思う存分楽しむため母達はディズニー貯金に励み、子どもたちはどのアトラクションに乗るかパーク巡りの計画を立てワクワクしながら当日を迎えました。職員はパーク内を歩き親子の思い出を写真に収め、母の負担軽減のために幼児のお子さんのお預かりをしました。宿泊所はディズニーオフィシャルホテルなので帰りのことは気にせず閉園まで楽しんで親子が沢山いました。次の日の朝食は豪華バイキング。毎日忙しく食べている母達に優雅に過ごしてもらえました。

今回の旅行では、満面の笑みを浮かべる母や子ども達の様子が見られ、職員としては嬉しい限りです。また、母から「ディズニーへ行くことが出来たことでこれからも前向きに頑張ろうと思えました」という言葉をいただきました。仕事、育児、学校など日々の生活をこなしていくのは大変ですが、旅行＝ディズニーランドという非日常から良い刺激や元気をもらうことができるのだと感じることができました。



改めて見えた日常の力

リフレここのえ 母子支援員 野島 未央花

私事ですが、令和5年に第1子を出産した関係で1年程産休・育休に入り、今年の5月から勤務を再開しました。

産休に入る前に、私には心配な子どもがいました。その子は夜遅くまでゲームをしている事で朝寝坊が多く、登校のための朝の集合時間に間に合わない日が続いていました。学童保育の職員と協同で早寝早起きのための取り組みを始めましたが、本人ののんびりとした性格もあって習慣化することが難しく、私は取り組みの途中で休みに入ってしまうことから後ろ髪をひかれる思いがありました。

しかし1年後、その子は毎朝間に合って来られるようになっていました。日常の積み重ねの中で子どもや家庭が成長していく力を目の当たりにし、日々の生活を支援していく私たちの仕事の価値を改めて感じさせられました。先日その子はもう自分で起きられるから、と朝の取り組みを卒業することになりました。自分で課題を解決できた経験をぜひ自信にしてほしいと願っています。



学童の日常と非日常

リフレここのえ 少年指導員 林 つく詩

リフレここのえ学童の日常はみんなで遊ぶことや学習をして過ごすことであり、非日常は普段とは異なる特別な行事です。学童の日常は安定感や安心感を育む土台となり、日常の連続を積み重ねることで非日常である行事の中で子どもたちの成長を感じることができま

す。この夏にも学童でキャンプに行きました。自分の荷物を持って公共交通機関を使い、自分の足でキャンプ場へ行き、川遊びやカレー作りをし、バンガローで寝ることを経験しました。自然体験が少ない子どもたちは初めて経験することばかりで、目を輝かせて全力で遊び夜はぐっすり寝ていました。

この非日常を十分に楽しむために日常の学童から取り組みをします。子ども達からは「遊ぶ時間が減ってしまい大変だ」という声も出ますが、子ども達が頑張った分だけより充実したキャンプを作ることが出来るので、職員も一緒に頑張ろうという気持ちを持ってやっています。



非日常が日常に変わる時

オリーブ八王子 塾長 星野 大河

オリーブ八王子の塾長になってから約1年が経ちました。塾長として日々、業務に関わることが「非日常」から、やっと「日常」になってきました。

オリーブ八王子に通塾している、ある高校生がいました。彼女は昨年、高校での人間関係のトラブルから「学校行きたくない」「辞めようかな」と言い、不登校気味になっていました。そこで、塾では彼女に対し「今、高校に通い卒業することが希望する進路に繋がること」を伝えることや、リフレに寄ってから登校することに取り組みました。その後も彼女の気持ちは上下を繰り返し、1年が経ちました。

今年の夏、彼女は「今度、友達とサマーランド行くから塾休むね」「夏休み中に友達とBBQするんだ」と語ってくれました。1年前、彼女にとって「非日常」だったことが今では「日常」になりつつあるのです。

子どもが望む「日常」には様々な形がありますが、それぞれが望む「日常」を実現する支援を、これからもオリーブ八王子でしていきます



★てんとうむしカフェ開催★

子育て応援ひろば てんとうむし担当 内藤 珠美

今年度よりてんとうむしひろばで毎月第3水曜日にてんとうむしカフェ（子ども食堂）を開催しています。

離乳食期のお子さん、つかみ食べ期のお子さん、野菜が苦手なお子さんなど様々ですが、ママ、パパが工夫して食べさせているのをお手伝いしながら、次はこうしたほうが子どもは食べやすいかもしれないね、などとスタッフで話しながらメニューを毎月決めていきます。みんなが笑顔いっぱいになれるてんとうむしカフェを目指していきます。



てんとうむしカフェ

☆てんとうむしカフェの様子☆



～ご寄付のお願い～

- 1 郵便振替 : 社会福祉法人同胞援護婦人連盟 00110-1-499359
- 2 ゆうちょ銀行 : 社会福祉法人同胞援護婦人連盟 019店 当座 0499359
 - ・折り返し当法人からの領収書をお送りします。
 - ・社会福祉法人に対するご寄附は確定申告で所得控除の対象になります。
 - ・住民税控除についてはお住まいの区市町村へお問い合わせください。



社会福祉法人

同胞援護婦人連盟

児童養護施設 こどものうち八栄寮
母子生活支援施設 リフレここのえ
八王子市 子ども家庭サービス事業

〒193-0944 東京都八王子市館町 2232-1
Tel:042-661-5891 Fax:042-667-0006
<http://www.doenfujin.jp>

編集後記

今回のテーマは「日常・非日常」です。日々、私たちは生活の場で子どもの「日常・非日常」両方に関わっています。

しかし、各々が定義する「日常・非日常」には人の数だけ違いがあります。子どもの一番近くで感じる、職員それぞれの「日常・非日常」を、この「えん」にて覗いて頂けたら幸いです。

【広報誌担当 花島まどか・馬淵将吾・星野大河】

ご意見・ご感想・ご質問を法人宛のお手紙または FAX でぜひお寄せ下さい。お待ちしております。